

研究会レポート：1950年代の日米美術交流に関する研究会

向井 晃子

I 研究会概要

タイトル：1950年代の日米美術交流に関する研究会

開催趣旨：近年、日本の近現代美術史の分野では、戦前戦後を架橋する視点を具えた研究や1945年からの10年間に焦点をあてて戦後美術の出発を探る研究が目立つ。今回の研究会は、こうした戦後美術研究の一環として1950年代の日米美術交流に焦点を当てるものである。国内外から美術史研究者を招き、話題提供を求めるとともに討議を行って研究の深化を目指す。

日時：2019年10月5日（土）13:15～17:30 場所：聖徳大学10号館：051教室

主催：科学研究費補助金 基盤研究（C）

「1950年代日米美術の「人物交流」プログラムに関する研究」

プログラム：

13:15～13:30 趣旨説明および発表者紹介：桑原規子

研究発表（質疑応答含む）

13:30～14:15 桑原規子（聖徳大学）

「山田智三郎と戦後の日米美術交流」

14:15～15:00 江口みなみ（横浜美術館学芸員）

「長谷川三郎 戦後の創作とネットワーキングを中心に」

15:15～16:00 向井晃子（神戸大学大学院国際文化学研究推進センター協力研究員）

「前衛書の周縁化と書の海外展：森田子龍の貢献と今泉談話の書の『純血』」

16:00～16:45 味岡千晶（日本美術コンサルタント、在オーストラリア）

「米国ライフスタイル誌のShibui特集—美意識の需要と供給」

16:45～17:30 全体討議

II 研究会報告

開催趣旨の下、幅広いテーマの発表がなされ、私は1950年代の書の海外巡回展について発表した。特に興味深かった点は、各発表での登場人物が所々重なり、1950年代の日米美術交流が複数のキーパーソンを介して、様々な分野でつながり展開されていた状況が見えたことだった。その結果、それらのキーパーソンをきっかけに活発で意義深い意見交換が行われ、前衛書も同時代の美術交流の中の一つの展開として議論できることが確認できた。充実した研究会で、主催者の丁寧な運営に深謝している。